

大項目	I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置
-----	---

中項目	1 歴史・伝統文化の保存とその継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
-----	---

事業名	(1)ー1 適時適切な収集
担当者	担当部課 学芸研究部列品管理課 事業責任者 列品管理課長 谷 豊信
実績・成果	・国民共有の貴重な財産として永く後世へ伝えられるべき、優れた作品4件（内、重要文化財1件）を購入した。 内訳：書跡1件、刀剣1件（重要文化財）、漆工2件 決算額 291,500,000 円

補足事項	・菊螺鈿鞍は、数少ない鎌倉時代の螺鈿作品として貴重である。薄い貝片を用い、繊細な切り抜き、切り透かし技術を駆使した優品である。 ・源氏物語蒔絵源氏簞笥は、豪華かつ入念な作行を示している。家紋を散らしていることから大名婚礼調度の一部と考えられる。江戸時代の漆工や武家文化に関する展示に活用できる佳品である。 ・重要文化財の刀（無銘 伝当麻）は、当麻派の優品である。長く当館に寄託され、展示に活用してきたものであるが、今回購入することとなり、展示の質を維持することができるようになった。 ・以上3件は当初予算による購入であるが、他に賛助会員寄附金により一休宗純墨蹟を購入することができた。
------	---



購入品 (上) 菊螺鈿鞍
(下) 源氏物語蒔絵源氏簞笥

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	収蔵品件数	113,258件	—	—	経年変化	112,439	112,529	112,776	113,258
	うち国宝	87件	—	—		87	87	87	87
	うち重要文化財	629件	—	—		619	622	624	629
	購入件数	4件	—	—		13	7	8	4
年度実績 評価総括	S (A) B C F (S、Fの理由)								
中期計画 記載事項	体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。 (東京国立博物館) 日本を中心にして広く東洋諸地域にわたる美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。								
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調								

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承									
事業名	(1)-1 適時適切な収集									
担当者	担当部課	学芸部			事業責任者	列品管理室長 若杉準治				
実績・成果	- 博物館展示の活性化と高次の調査研究の対象となり、国民が文化の豊かさを実感することができる貴重な作品 23 件を購入した。 - 購入に際しては、中期目標にもあるとおり、「京都文化」を意識しているが、今年度は京都ゆかりの近世絵画 5 件、また京都の寺院に伝存する文化財と一連の中国絵画と中国書跡 1 件のほか、中国書跡 1 件、金工 13 件を購入した。 - 内訳：絵画 6 件、書跡 2 件、金工 13 件、漆工 1 件、考古 1 件 - 決算額 359,320,000 円									
補足事項	- 狩野探幽筆柿本人麿像は、後水尾天皇の近臣で、当時の歌壇をリードした堂上歌人として知られる中院通村の賛があり、近世初期の京都文化を知る資料である。 - やすらい祭絵巻、牛祭絵巻はともに京都を代表する祭を描いた絵画資料として重要であるだけでなく、特別展観「上田秋成」の開催を機に出現したことで注目される。 - 聖賢図押絵貼屏風は、京狩野派の山雪筆になるもので、近い将来に予定されている「山楽・山雪」展での活用が期待される。 - 陳賢筆観音図は、宇治万福寺所蔵の重要文化財観音図帖と一連の作品であり、黄檗美術の重要作品である。 - 玉篇卷第九残卷（写真）は中国南朝梁時代に編纂された字書で、本作品は唐時代の書写になる。日本に伝存する玉篇は 5 件が知られており、本作品は早稲田大学に所蔵される国宝の 1 巻から逸失した 3 紙で、1 紙でも重要文化財に指定されていることをみれば、その重要性は自明である。 - 重要文化財金銅錫杖頭は鎌倉時代の特徴をよく示す作品で、同じく重要文化財に指定されている世界救世教所蔵の 1 柄と極めて酷似しており、同一工房の制作が想定される点でも注目される。 - 押出三尊仏は、奈良・當麻寺奥院に所蔵される作品と同型のもので注目され、当館の仏教考古の展示充実に資するものである。  「玉篇卷第九残卷（自嗣字至数字） 紙背金剛界私記」									
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年 変化	19	20	21	22	
	収蔵品件数	6,584 件	—	—		6,386	6,417	6,526	6,584	
	うち国宝	27 件	—	—		27	27	27	27	
	うち重要文化財	177 件	—	—		177	177	176	177	
	購入件数	23 件	—	—		36	8	7	23	
年度実績 評価総括	S (A) B C F (S、F の理由)									
中期計画 記載事項	体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。 (京都国立博物館) 京都文化を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。									
中期計画に対して順調に成果を上げているか。					順調					



「玉篇卷第九残卷（自嗣字至数字） 紙背金剛界私記」

中項目	1 歴史・伝統文化の保存の継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
-----	---

事業名	(1)－1 適時適切な収集									
担当者	担当部課		学芸部企画室		事業責任者		学芸部長補佐 岩田茂樹			
実績・成果	購入が7件、寄贈が8件、都合15件の文化財が新たな収蔵品として加わった。うち購入分の内訳は次のとおり。 絵画 絹本著色春日地藏曼荼羅 1幅 鎌倉時代(14世紀) 絹本著色千手観音影向図 1幅 鎌倉時代(13世紀) 彫刻 木造僧形立像 1軀 鎌倉時代(13世紀) 書跡 法華経(建治二年東大寺僧宗性発願経) 8巻 鎌倉時代(建治2年：1276) 工芸 黒漆宝塔 1基 室町時代(16世紀) 考古 三彩小壺(筑前早良郡出土) 1口 奈良時代(8世紀) 瀬戸灰釉櫛目文瓶子 1口 鎌倉時代(13世紀) 購入代金総額は95,575,000円。									
補足事項	絵画部門の購入品のうち春日地藏曼荼羅は、春日野の景観のなかに春日社三宮本地仏としての地藏を描いたもので、類品中最古の作例として貴重。また千手観音影向図は、神仏習合思潮のなかで生まれたとみられもので、類品のまれな図様を有し、かつ画中人物は似絵の代表的作例にも匹敵する優れた造形を示している。 彫刻部門の僧形立像は、像の尊名こそ確定できないものの、いかにも鎌倉時代らしい写実性を示す佳品で、表面の彩色をはじめ保存状態もよいもの。 書跡部門の法華経は、鎌倉時代中期の東大寺の学僧として名高い宗性の発願によるもので、当時の寺院生活の実態を示す史料としても高い価値を有する。 工芸部門の黒漆宝塔は、奈良・西大寺に伝来した国宝・金銅宝塔を模したとみられるが、類品中最も出来のよいもので、南都における舍利信仰から生まれた遺品と位置づけられる。 考古部門の購入品のうち三彩小壺は、遺例の稀少な奈良三彩の貴重な遺品。瀬戸灰釉櫛目文瓶子は梅瓶の名品で、出土地も判明する資料性の高いもの。 以上の購入品および寄贈品のいずれも、今後の当館の活動において重要な役割をになう文化財とみなされる。									
定量的評価	項目		実績	目標値	評価	19	20	21	22	
	収蔵品件数		1,827	—	経年 変化	1,794	1,805	1,812	1,827	
	うち国宝		13	—		12	12	12	13	
	うち重要文化財		109	—		107	108	110	109	
	購入件数		7	—		2	7	4	7	
年度実績 評価総括	S (A) B C F (S、Fの理由)									
中期計画 記載事項	体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。 (奈良国立博物館) 仏教美術を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。									
中期計画に対して順調に成果を上げているか。					順調					



絹本著色 春日地藏曼荼羅

中項目 1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

事業名	(1)－1 適時適切な収集								
担当者	担当部課	文化財課	事業責任者	主任研究員 丸山猶計					
実績・成果	・日本とアジア諸国との文化交流の足跡をしめす美術、考古及び歴史資料等の分野の資料を積極的に収集し、あわせて国民共有の貴重な財産として永く後世へ伝えられるべき優れた文化財として、31件を購入した。(内、国宝・重要文化財0件) 内訳：絵画4件、書跡5件、陶磁2件、漆工1件、染織13件、歴史資料6件 決算額：1,116,488,000円								
補足事項	・絵画分野では、鎌倉時代の仏画の名品で、表装も軸端以外当初とみなされる「絹本着色仏涅槃図 命尊筆」を筆頭に、時代の美意識が顕著に表れた優品を購入した。 ・書跡分野では、後白河法皇院宣をはじめとする12世紀末の興福寺別当宛の文書34通を集めた「紙本墨書興福寺関係文書」などを購入した。 ・陶磁分野では、仙台・伊達家伝来と考えられ、中国・南宋から元時代にかけて制作された唐物茶壺「黄清香茶壺」などを購入した。 ・染織分野では、「茜地山水松鶴文更紗」をはじめとする完品のインド更紗3件など、東西交流史的にも貴重な作品を購入した。 ・漆工分野では、琉球漆器の典型で保存状態が良好な「葡萄栗鼠螺鈿箔絵料紙硯箱」を購入した。 ・歴史資料分野では、長崎阿蘭陀通詞の西家に伝来した蘭英語などによる文書群で、18～19世紀、出島のオランダ商館とわが国との交流を具体的に示す「長崎阿蘭陀通詞西吉兵衛家関係文書」などを購入した。 ・これらの購入品は、わが国と大陸、あるいは九州と本州などとの文化交流を説明する上で有効な資料であり、4階の文化交流展示室（平常展示）において多彩な活用が見込まれる。 ※収蔵品件数については、従来、付属品として取り扱っていた1件を22年度から列品として計上した。 ※収蔵品件数のうち重要文化財28件には、平成22年6月29日付けで指定を受けた奈良三彩壺1件を含む。								
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	収蔵品件数	433件	—	—	経年変化	333	370	397	433
	うち国宝	3件	—	—		3	3	3	3
	うち重要文化財	28件	—	—		24	25	27	28
	購入件数	31件	—	—		42	30	27	31
年度実績 評価総括	S (A) B C F (S、Fの理由)								
中期計画 記載事項	体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。 (九州国立博物館) 日本とアジア諸国との文化交流を中心とした、美術、考古資料及び歴史資料を収集する。								
中期計画に対して順調に成果を上げているか。					順調				



「絹本着色仏涅槃図 命尊筆」

中項目	1 歴史・伝統文化の保存とその継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
-----	---

事業名	(1)ー2 寄贈・寄託品の受入と活用									
担当者	担当部課	学芸研究部列品管理課	事業責任者	列品管理課長 谷 豊信						
実績・成果	- 作品の寄贈は 23 件あった。うち 10 件はインドネシアの伝統的な影絵芝居であるワヤン・クリに用いられる人形であり、平成 24 年度に新装開館予定の東洋館における東洋民族資料の展示を充実させるものである。 - 新規寄託は 5 件であった。 - 寄託終了は 13 件である。内、当館へ寄贈となった物が 1 件、当館で購入した物が 1 件、所有者に返却した物が 11 件（内、重文 3 件）である。寄託者へ返却したもののうち 1 件（重文）は、国（文化庁）が購入した。 - その結果、寄託品件数は昨年度より 8 件減少した。 - 登録美術品については、増減がなかった。									
補足事項	- 文化財のご寄贈は、所有者の意思によるものであり、毎年、ご寄贈のお申し出があることは、文化財保存のため当館が努力していることが高く評価されていることの表れと考えられる。 - 本年度の新規寄託は 5 件にとどまった。 - 寄託減の要因は、所蔵者の経済的事情によると思われる取下げもあるが、社寺の宝物館整備に伴う取り下げ、当館への寄贈、国による購入もあり、単純ではない。 - 寄託品の数と質を維持していくために、今後も所蔵者に寄託を働きかける必要がある。 - 登録美術品制度は、個人所有の文化財の公開促進のため文化庁が推奨している制度であり、今後も文化庁と連携をとりつつ適切な運用を図る。									
									寄贈品 ワヤン・クリ	
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年 変化	19	20	21	22	
	寄贈品件数	23 件	—	—		26	81	43	23	
	寄託品件数	2,726 件	2,400	A		2,743	2,750	2,734	2,726	
	うち新規寄託品件数	5 件	—	—		17	39	3	5	
	登録美術品件数	3 件	—	—		3	3	3	3	
年度実績 評価総括	S (A) B C F (S、Fの理由)									
中期計画 記載事項	収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかける。									
中期計画に対して順調に成果を上げているか。			順調							



寄贈品 ワヤン・クリ

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(1)-2 寄贈・寄託品の受入と活用								
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長 若杉準治					
実績・成果	(寄贈) - 今年度、寄贈は 35 件で、寄贈者は 8 人であった。 内訳：絵画 14 件 書跡 8 件 金工 4 件 漆工 4 件 染織 2 件 考古 1 件 歴史資料 2 件 (寄託) - 今年度の新規寄託は 107 件。展示館の建て替え工事のため、当面平常展示での活用はできないが、例年通りの数の寄託があり、研究資料として、また特別展覧会での活用が見込まれる。 内訳：絵画50件 書跡23件 金工 10件 陶磁11件 漆工 6件 染織2件 考古 2 件 歴史資料 3 件								
補足事項	- 寄贈では大丸松坂屋から京都三大祭の一に数えられる祇園祭の山鉦のひとつ函谷鉦の見送りに用いられていた中国明時代の「花卉鳥獸文様見送」と、藤原鎌足を祀る多武峯寺に伝来した仏具「刺繍三昧耶形幡」の 2 点の染織の寄贈があり、また坂本龍馬が暗殺された京都近江屋の末裔の井口氏から関係の歴史資料の寄贈があった。 - 寄託では、天竜寺で新たに発見された夢窓疎石所用ほかの伝法絵一式が寄託され、「高僧と袈裟」で公開されたこと、上野家から所蔵品が一括寄託され、上野コレクション寄贈五十年を記念して開催する「筆墨精神」で公開されること、また西山浄土宗総本山光明寺から仏教美術の寄託を受け、春に開催する「法然―生涯と美術―」で一部出品されることなど、特別展覧会と連動した有意義な寄託が行われた。 - そのほか、奈良・興福院、香川・円明院、京都・黄梅院から、当館の展示の核の一つである近世の障屏画がまとまって寄託された。 - 寄託品の返却件数 59 件								
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	新規寄贈品件数	35 件	—	—		30	21	102	35
	寄託品件数	6,005 件	5,800 件	A		6,154	5,907	5,957	6,005
	うち新規寄託品件数	107 件	—	—		117	111	180	107
年度実績評価総括	S (A) B C F (S、F の理由)								
中期計画記載事項	収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。また既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかける。								
中期計画に対して順調に成果を上げているか。					順調				



花卉鳥獣文様刺繍見送（祇園祭函谷鉦旧見送）
松坂屋コレクション」

中項目	1 歴史・伝統文化の保存の継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
-----	---

事業名	(1)-2 寄贈・寄託品の受入と活用									
担当者	担当部課	学芸部企画室	事業責任者			学芸部長補佐 岩田茂樹				
実績・成果	寄贈については、3人の所蔵者から計8件の文化財を受け入れた。寄託については、新規に6件（うち重要文化財2件）の文化財を受け入れた。 〔寄贈〕 彫刻：木造菩薩立像 1 軀 平安時代（11～12 世紀） 書跡：公盛書状 1 巻 江戸時代（正徳5年：1715） 工芸：鼓胴形花器 北村久齋作 1 口 昭和時代 二月堂机 1 基 昭和時代 蒔絵乱箱「袖」 北村大通作 1 口 昭和時代 俱利迦羅龍蒔絵経箱復元模造製作工程手板 1 枚 平成時代 玳瑁螺鈿花形盤 北村昭齋作 1 口 平成時代 考古：甕 1 口 弥生時代（2 世紀） 〔寄託〕 彫刻 3 件 書跡 1 件 工芸 2 件									
補足事項	彫刻部門の寄贈品は、後補部分が多く、展示等に活用するためには若干の修理を要するものの、平安時代後期にさかのぼる貴重な文化財であり、様々な場面での活用が期待できる。 工芸部門の寄贈品は、漆芸家北村昭齋氏（人間国宝）からの寄贈で、昭齋氏とその先代大通氏、先々代久齋氏が、古代から中世にいたる日本の重要な漆工作品を模造あるいは・模造を踏まえて創作されたもので、わが国の漆工の技術的解明に寄与する貴重なものである。 考古部門の寄贈品は、奈良県田原本町唐古から出土したと伝えるもので、基準的遺品であり、今後の調査研究、教育普及などにおける活用が期待できる。 彫刻部門の寄託品のうち重要文化財2件（東鳴川観音講・木造不空索観音坐像／長隆寺・木造薬師如来坐像）は、収蔵庫および仏堂修理にともない緊急避難的に当館に寄託されたもので、前者は平成23年夏に返還が予定され、後者は同年3月末にすでに返還されたが、ともに「なら仏像館」において展示を行い、多数の観覧者の目にふれることとなった。残り1件の彫刻は、当館の文化財調査によってその価値が見いだされたもので、将来の指定文化財候補となる優れた作品で、今後の展示活動に組みこんでゆきたい。 書跡部門の寄託品である東城戸町自治会・年中行司記は、春日信仰にもとづく年中行事である春日講に関する重要史料で、これにより、ならまちの信仰・生活をリアルに甦らせるに足るもの。 工芸部門の寄託品のうち、性海寺・木造黒漆塗舍利厨子は、工芸部門の展示の柱となっている舍利信仰の代表的作例のひとつであり、今後の展示活動に寄与するもの。また海住山寺・牛玉像は類品まれな遺品で、中世の南都における信仰の諸相を示すことのできる重要な作品である。 寄託品総数は10件減少したが、返還した作品のうち2件は文化庁の購入対象となったものであり、以後も当館において展示が可能となる。また所蔵者である寺院に展示収蔵施設が竣工したために返還したものや、所蔵者である財団が財産の整理を行ったことにもなって返還したものなどが含まれる。差し引きでは減であるが、6件の新規寄託作品もあり、寄託作品の増加のための努力は一定の成果をあげていると考える。									
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22	
	新規寄贈品件数	8	—	—		2	4	3	8	
	寄託品件数	1,947	2,060	B		2,057	2,067	1,957	1,947	
	うち新規寄託品件数	6	—	—		113	15	9	6	
年度実績 評価総括	S ㊦ B C F (S、Fの理由)									
中期計画 記載事項	収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。また既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかける。									
中期計画に対して順調に成果を上げているか。					順調					



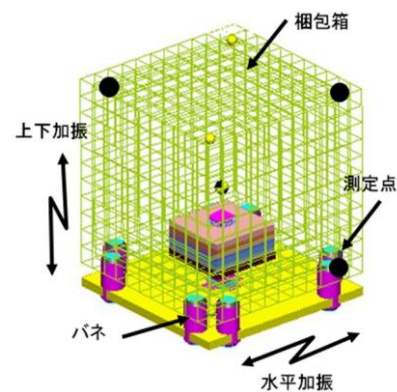
年中行司記

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承									
事業名	(1)－2 寄贈・寄託品の受入と活用									
担当者	担当部課	文化財課	事業責任者	研究員 原田あゆみ						
実績・成果	寄贈 4 件 (内訳：彫刻 1 件、染織 2 件、民族資料 1 件) 新規寄託 50 件 (内訳：絵画 2 件、陶磁 48 件)									
補足事項	彫刻分野の寄贈品である「十一面観音菩薩立像」は、17 世紀の制作と考えられ、檀像風彫像の近世における展開を示す佳作。これまで、当館は江戸時代の仏像を収蔵していなかったため、仏像展示における有効な活用が期待される。 染織、民族資料分野における寄贈は、20 世紀に制作された久留米絣の着物等と中国・ミャオ族の衣装で、保存状態が良好な資料である。寄贈者の希望により、当館の体験型展示室「あじっぱ」で、教育普及用資料として活用の予定である。 絵画分野における寄託は、1 件は南宋画院の代表的な画家・夏珪の山水図を考える上で有意義な作品、もう 1 件は江戸時代における雪舟作品観を考える上で重要な作例である。 陶磁分野では、18 世紀を中心とする輸出磁器のコレクションの寄託（48 件）を受けた。文化交流を展示の柱とする当館において、ヨーロッパにおける日本陶磁の受容状況を具体的に物語る資料として、今後大きな展示効果が期待できる。 なお、寄託品を 9 件返却したが、うち 1 件は購入の運びとなった。									
 色絵花鳥図婦人鈕有蓋大壺・広口大瓶 伊万里（有田）										
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年 変化	19	20	21	22	
	寄贈品件数	4 件	—	—		10	7	0	4	
	寄託品件数	1, 297 件	800 件	S		1, 091	1, 105	1, 256	1, 297	
	うち新規寄託品件数	50 件	—	—		214	46	197	50	
年度実績 評価総括	S (A) B C F (S、F の理由)									
中期計画 記載事項	収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかける。									
中期計画に対して順調に成果を上げているか。			順調							

中項目	1 歴史・伝統文化の保存とその継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承																		
事業名	(2) 適切な管理・保存 (1/2)																		
担当者	担当部課 学芸研究部列品管理課 事業責任者 列品管理課長 谷 豊信																		
実績・成果	(2)-1 収蔵品の管理・保存 -1 - 東洋館改修について、平成 24 年度中の開館に向けて準備を進めており、耐震補強は概ね完了したが、震災の影響により展示ケース取設けに遅れが生じている。 - 耐震補強工事中の東洋館において、工事の進展に伴い、東洋館内に残置していた文化財を 2 回にわたって東洋館内を移動した。 - 本館地下収蔵庫の前室に、書画調査用の壁およびピクチャーレールを新設した。 - 平成 20 年度末から始めた、収蔵品の所在と現状を悉皆的に調査する列品情報整備事業を継続して実施した。 - 歴史資料を中心とする旧資料部関係品を整理し、列品として編入するための作業を進めた。 - 収蔵品を移動したのちの新しい所在位置情報を、RFID・バーコード等を利用して電子的に記録して管理の万全を図るシステム（文化財移動情報登録システム）の開発も、昨年度から継続して進めている。																		
補足事項	- 列品情報整備事業に専念させるアソシエイト・フェローは、昨年度は 3 名であったが、本年度は 2 名採用し、計 5 名とした。今年度は本格調査の 2 年目にあたり、絵画・書跡・彫刻・金工・刀剣・陶磁・考古・民族・和書・東洋漆工・東洋考古・法隆寺献納宝物の諸分野で作業を進めた。このうち、民族・和書はほぼ完了した。平成 23 年 3 月末現在で、調査件数は 3 万 9900 件である。 - 列品所在情報記録システムの実証実験では、記録システムでえられた所在情報を、現行の収蔵品データベースに直接反映させる実験を行った。    上 東洋館を移動中の作品 中 列品情報整備の作業（東洋考古） 下 RFID・バーコード併用の作品タグ試作品																		
定量的評価	<table border="1"> <thead> <tr> <th>項目</th><th>実績</th><th>目標値</th><th>評価</th><th rowspan="2">経年 変化</th><th>19</th><th>20</th><th>21</th><th>22</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>—</td><td>—</td><td>—</td><td>—</td><td></td><td>—</td><td>—</td><td>—</td><td>—</td></tr> </tbody> </table>	項目	実績	目標値	評価	経年 変化	19	20	21	22	—	—	—	—		—	—	—	—
項目	実績	目標値	評価	経年 変化	19		20	21	22										
—	—	—	—			—	—	—	—										
年度実績 評価総括	S (A) B C F (S、Fの理由)																		
中期計画 記載事項	国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるとともに、展示等の博物館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、耐震対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・活用のための環境整備を図る。																		
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調																		

中項目	1 歴史・伝統文化の保存とその継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
-----	---

事業名	(2) 適切な管理・保存 (2/2)									
担当者	担当部課	学芸研究部保存修復課	事業責任者	保存修復課長 神庭信幸						
実績・成果	(2)-1 収蔵品の管理・保存 -2 ・収蔵庫及び展示室など 366 地点の温湿度を計測し、環境の評価及び処置を実施した。空気環境に関しては、収蔵庫及び外気など 34 地点におけるアルデヒド類及び有機酸類などを計測した。環境評価に基づき、除加湿器の設置、フィルターの交換などの措置を講じた。 ・収蔵庫など 447 地点における生物生息状況を冬季と夏季の 2 回にわたり調査した。また、ゴキブリなどの生活害虫を防除するため、夏季に防虫薬剤を全館に設置した。 ・東洋館耐震工事に合わせた展示室リニューアルを期に展示ケースに使用する免震装置の検討、展示ケースの性能に関する検討を実施した。 (2)-2 保存環境の調査研究の実施 ・本格修理のための列品調査、対症修理の実施、列品貸与の点検として合計 2368 件の保存カルテを作成した。 ・収蔵庫、展示室など 171 箇所の温湿度に関し、その状態から 3 段階に環境を分類（クラスⅠ、Ⅱ、要注意）した平成 22 年次報告書を作成した。 ・列品の貸与・返却及び借用の際に、輸送中の梱包ケース内とトラックなどの輸送機材に発生する振動・衝撃に関し、国内外合わせの計 2 件（東大寺大仏展における輸送など）の輸送を調査した。 ・文化財の梱包に頻繁に使用される緩衝材が輸送中の振動・衝撃を伝達する際に現れる特性について評価するための実験を行った。今年度は発泡ポリエチレン（サンテックフォーム）について調査した。									
補足事項	・文化財保存修復学会第 32 回大会（平成 22 年 6 月 12 日、13 日・岐阜市）において発表した「収蔵庫内の空気汚染物質に対する濃度指針の検討」の中で、当館の新しい空気汚染物質に対する新しい濃度指針を提示した。 ・平成 22 年 11 月 4、5 日の両日、フランス国立科学研究センターにおいて開催したフランス文化通信省、フランス国立科学研究センター、日本学術振興会主催による日仏ワークショップ『文化遺産保存のための科学』で、「The Impact of the Dolly in Global Transport Environment」、「What is Remedial Treatment？ An Approach to Preventive Conservation at the Tokyo National Museum」などのポスター発表を通して、当館の保存管理について紹介した。 ・社団法人日本包装技術協会主催・第 48 回全日本包装技術研究大会（12 月 7 日・京都大会）において発表した「CAE シミュレーション解析による緩衝機材の特性評価事例」を発表し、文化財輸送の振動評価に初めてコンピュータシミュレーションを導入した。 ・株式会社大林組技術研究所において、東洋館に導入される新規展示ケースへ組み込まれる新型免震装置の評価実験および展示ケースの耐震実験を実施した（平成 22 年 5 月 11 日、7 月 15 日）。									
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22	
	保存カルテ作成件数	2,368 件	800	S		1,725	2,693	1,989	2,368	
年度実績評価総括	S (A) B C F (S、F の理由)									
中期計画記載事項	国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるとともに、展示等の博物館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、耐震対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・活用のための環境整備を図る。									
中期計画に対して順調に成果を上げているか。					順調					



文化財の輸送時に観測される振動衝撃を評価するために使用したモデル。

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
-----	---

事業名	(2) 適切な管理・保存 (1/2)								
担当者	担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	総務課長 植田義雄 列品管理室長 若杉 準治					
実績・成果	・平常展示館の建替工事は、平成24年度末完成・25年度開館に向けて進んでいる。 ・平常展示館の建て替えに伴い、同館内収蔵庫から館蔵品、寄託品のすべてを東収蔵庫等にて保管を行った。 ・展示室及び収蔵庫における適正な温湿度管理を行った。 ・特別展示館耐震診断業務の結果を受け、具体的な耐震補強工法等を検討した。 ・半年ごとに実施している寄託品の期間継続にともなう点検を着実に実施した。								
補足事項	・空調設備機器については予防的なメンテナンスときめ細かな運転監視を行い、展示室及び収蔵庫の温湿度環境の適正管理を行っている。 ・将来構想検討委員会建設事業小委員会において耐震補強の工法、方針等の検討を行った。								
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年 変化	19	20	21	22
	—	—	—	—		—	—	—	—
年度実績 評価総括	S ㊤ B C F (S、Fの理由)								
中期計画 記載事項	国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えとともに、展示等の博物館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、耐震対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・活用のための環境整備を図る。								
中期計画に対して順調に成果を上げているか。				順調					

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
-----	---

事業名	(2) 適切な管理・保存 (2/2)								
担当者	担当部課	学芸部		事業責任者	列品管理室長 若杉 準治 文化財管理監 中村 康				
実績・成果	・展覧会準備中に適宜巡回して害虫の持込み侵入の防止と清掃の徹底を指導、取りこぼしを拾い、開会時の虫・ゴミゼロを実現した。 ・展覧会中、展示ケース内に入った虫の採取、毛髪等ゴミの除去を開館前に行なった。 ・6月以降10月に及んだ例年にない高温多湿のため、チャタテムシ、ダニ、クモ、シミ、コイガ、カツラブシムシ、ゴキブリの侵入、徘徊が見られたので以下の措置を講じて駆除した。 (1) 7・8月の「上田秋成・新収品」展の前に全壁付ケース床面のクリーンルーム清掃業者による吸引拭取り清掃を行ない、虫、カビ等の除去を図った。 (2) 7・8月の「上田秋成・新収品」展会期中、展示ケース内と館内のトラップによる虫の生態調査を業者に依頼して行なった。 (3) 7・8月の「上田秋成・新収品」展と10・11月の「高僧と袈裟」展の会期中、一部の展示ケース内に予防のための蒸散性殺虫剤プレートを置いた。 (4) 10・11月の「高僧と袈裟」展の会期中、ゴキブリの徘徊する箇所にゴキブリ用の誘引トラップとホウ酸剤を置いた。 (5) 1・2月の「筆墨精神・園田湖城」展前に、展示ケース内の蒸散性殺虫剤による燻蒸と展示ケース前床面の残効性殺虫剤の塗布を行った。 ・空調については、高温多湿の状況が続いた7・8月の「上田秋成・新収品」展では湿度を低めに設定し、低温乾燥気象下の1・2月の「筆墨精神・園田湖城」展では、温度を低めに湿度を高めに設定して作品と観覧環境の保全を図った。 ・館蔵品に係る保存カルテを作成した。 実績 108件								
補足事項	・収蔵品の保存カルテについて、ほぼ目標通りに作成でき、収蔵品の保存状況についての情報蓄積が進んだ。								
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	保存カルテ作成件数	108 件	100 件程度	A		140	174	214	108
年度実績評価総括	S (A) B C F (S、Fの理由)								
中期計画記載事項	国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えとともに、展示等の博物館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、耐震対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・活用のための環境整備を図る。								
中期計画に対して順調に成果を上げているか。				順調					

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
-----	---

事業名	(2) 適切な管理・保存								
担当者	担当部課	学芸部保存修理指導室	事業責任者	保存修理指導室長 谷口耕生					
実績・成果	・展示室および展示ケース内の温湿度の管理を図るため、無線 LAN によるリアルタイムの温湿度管理システムの導入し、正倉院展のような多数の観覧者がもたらす展示室内の温湿度環境の変化に、科学的データを以て即時に対応することが可能となっている。 ・西新館耐震工事については展示施設として必要とされる耐震性能を確保するための補強工事を行うとともに、展示環境の向上を意図した展示ケース・内装・照明設備等の更新を行った。また、監視面の強化を図るための監視モニターの更新を行った。仏教美術資料研究センターについては、重要文化財指定の建造物であるため、必要最低限の耐震性を確保するとともに、原状に復しつつも現在の使用意図に照らした新たな平面計画の下、内装改修を行った。 ・文化財害虫の生息が確認された展示室・展示ケースを中心に防虫シートを設置し、併せて展示施設の周囲に害虫忌避剤を散布した。 ・IPM（総合的有害生物管理）の実践として、収蔵庫周辺や展示室内、調査室内の衛生環境保持のため、掃除と防塵マット交換を定期的に実施した。 ・保存カルテについては、昨年度の途中から新たに文化財の個別写真が添付されたフォームに統一し、保存修理指導室で作成・保管する新システムに移行した。本年度から本格的に運用が軌道に乗ったことで、機動的かつ詳細に文化財の損傷状態を把握することが可能になったことに加え、保存カルテの作成件数も飛躍的に増加した。 ・IPM の前提として、館内の文化財害虫生息状況を把握するため、文化財の保管および展示にかかわる箇所を中心に、防虫トラップを1ヶ月に1回設置・回収し、調査結果の蓄積・分析を行った。								
補足事項	・防虫トラップは展示室収蔵庫文化財修理所等 150 箇所に設置し、1 か月ごとに回収したものを外部業者に調査委託し、その結果分析を行い、文化財害虫の侵入の防止に努めた。 ・無線 LAN による温湿度管理システム導入後も、毛髪計、データロガーも引き続き使用し、計測結果の精度を高めた。 ・以上の防虫トラップ設置および無線 LAN 温湿度管理システムによって得られたデータは、西新館の耐震工事および新免震ケース製作に際して、展示室内・展示ケース内の温湿度環境保持や文化財害虫防止対策への重要な指針となった。 ・西新館耐震工事に伴う新造ケースの残留ガス（VOC）をチェックするため、外部機関に検査を依頼するとともに、館内でもパッシブインジケータを利用した独自検査を実施した。 ・西新館耐震工事に伴って自動調湿装置を内蔵した免震ケースを新造し、気象条件や多数の観覧者など外的要因で展示室内の温湿度環境に変動が生じた場合でも、展示ケース内の温湿度を安定して好条件に保つことができた。 ・なら仏像館のリニューアル・オープンに併せて、同館にも無線 LAN 温湿度管理システムを新たに導入し、同展示室内の温湿度状況の把握に努めた。 ・5 月 21 日（金）に当館講堂において「無線センサーネットワークの実務への適用」をテーマとする機械学会の研究会を開催し、当館無線 LAN 温湿度管理システムについて保存修理指導室長による報告を行い、同システムの普及に努めた。								
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	保存カルテ作成件数	218 件	100 件	S		103	108	114	218
年度実績評価総括	S (A) B C F (S、F の理由)								
中期計画記載事項	国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるとともに、展示等の博物館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、耐震対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・活用のための環境整備を図る。								
中期計画に対して順調に成果を上げているか。				順調					

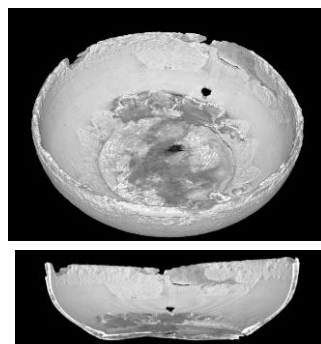


無線 LAN 対応温湿度センサー

無線 LAN 温湿度管理システムによる
展示ケース内 24 時間温湿度監視用
PC モニター画面

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
-----	---

事業名	(2) 適切な管理・保存									
担当者	担当部課	博物館科学課	事業責任者	博物館科学課長 本田光子						
実績・成果	① 収蔵庫・展示室等約 300 ヶ所に粘着トラップを設置し定期的モニタリングを実施し害虫侵入箇所と館内の害虫の生息状況を早期発見対処した。文化財搬入に際し、IPM メンテナンスに基づく収蔵準備作業を実施すると共に、必要に応じて殺虫殺菌処理を実施した。 ② 常設展示室 70 箇所、特別展示室約 30 箇所に温湿度計を設置して、環境データを解析した。 ③ 収蔵庫 30 箇所に温湿度計を設置して環境データを解析した。また、空気質やダストを調査して収蔵環境の改善を行った。 ④ 展示品を中心に X 線 CT スキャナや三次元計測装置、三次元プリンタを用いて保存状況と構造調査を実施した。測定結果は予防的保存に役立てると共に展示に反映した。 ⑤ 修理資料および収蔵資料を中心に保存カルテを作成すると共に、計画的な保存修理事業をすすめた。 ⑥ IPM の実施については、地元 NPO 法人やボランティア活動との連携に努め、文化財の適切な管理・保存について市民や地域の理解を深めた。									
補足事項	・平成 22 年度文化庁受託事業「美術館博物館活動基盤整備支援事業―市民と共にミュージアム IPM」を実施することにより、IPM ボランティア活動へのさらなる指導支援をすすめることができた。 ・環境データを解析することで、極めて安定した収蔵庫・展示環境を維持することができた。 ・元寇関連海底出土遺物（漆器・金属製品等）などの展示品を中心に X 線 CT スキャナや三次元計測装置による調査を実施し、文化交流展示や特別展示やトピック展示に反映した。 ・開館 6 年目で展示・収蔵環境をより安定させることができた。今後は安定化を維持したままで、より一層の効率化を図りながらエネルギーの削減に寄与したい。									
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経 年 変 化	19	20	21	22	
	保存カルテ作成件数	101 件	100 件	A		252	289	205	101	
	CT スキャン調査	60 件	—	—		35	40	44	60	
	三次元計測	58 件	—	—		20	42	45	58	
	殺虫殺菌処置	7 件	—	—		5	6	7	7	
年度実績評価総括	S (A) B C F (S、F の理由)									
中期計画記載事項	国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるとともに、展示等の博物館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、耐震対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・活用のための環境整備を図る。									
中期計画に対して順調に成果を上げているか。					順調					



元寇関連遺物（長崎県松浦市鷹島海底遺跡出土）の漆器の調査 X 線 CT スキャナによる保存状態や構造技法の調査

中項目	1 歴史・伝統文化の保存とその継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
-----	---

事業名	(3) 計画的な修理									
担当者	担当部課	学芸研究部保存修復課			事業責任者	保存修復課長 神庭信幸				
実績・成果	1) 修理計画立案に向けて、修理候補作品の選定のために新たに指定・未指定合わせて 79 件の作品の調査を実施した。これまで調査を終えたものと合わせ約 2000 件の作品が今後の修理計画に反映される。調査には必要に応じ X 線透過撮影、光学実体顕微鏡なども使用した。指定品については、絵画 13 件、書跡 3 件、陶磁 3 件について具体的な修理計画の策定を開始し、修理方針案の作成を行った。 2) 作品の応急（対症）修理を 1004 件実施。本格修理を 139 件実施した。 3) データベース構築のために 21 年度に本格修理を実施した 106 件の内、修理が完了した 98 件の修理内容についてデジタル化を実施した。21 年度に実施した本格修理に関して、東京国立博物館文化財修理報告書Ⅺを刊行した。 4) 紙本などの修理技術者として保存修復課に 3 名のアソシエイト・フェローを配置し、館内で実施する館蔵品の本格修理、応急（対症）修理を本格化させた。									
補足事項	1) 絵画、書跡などの本紙あるいは敷き紙などについて、植物繊維の同定を 11 件実施し、本紙の保存に関して検討を行った。 2) 修理前あるいは修理中に実施した科学的調査は、以下の通りである。 蛍光 X 線分析件数 10 作品、159 箇所測定 (A-10447 宇治橋図屏風、A-11189 風神雷神図屏風など) X 線透過撮影の科学調査 30 件 686 枚撮影 (A-1069 檜図屏風、A-10447 宇治橋図屏風など)									
当館アソシエイトフェロー及び装こう師連盟技師による宇治橋図屏風の本格解体修理										
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22	
	本格修理件数 保存修復関係資料（前年度修理実施分）のデータベース化	139 件 98 件	70 件 70 件	S A		101 97	75 85	106 53	139 98	
年度実績評価総括	S (A) B C F (S、F の理由)									
中期計画記載事項	国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるとともに、展示等の博物館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、耐震対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・活用のための環境整備を図る。									
中期計画に対して順調に成果を上げているか。			順調							



当館アソシエイトフェロー及び装こう師連盟技師による宇治橋図屏風の本格解体修理

中項目	1 歴史・伝統文化の保存とその継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
-----	---

事業名	(3) 計画的な修理								
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長 若杉準治					
実績・成果	- 文化財保存修理所修復資料のデータベース化を図った。 - 昨年改訂した契約方法等にしながら、業者選定の公平性、透明性に留意して修理を実施した。 実績 絵画 4 件、書跡 3 件、彫刻 1 件、漆工 1 件								
補足事項	- 近年の収集品（購入・寄贈）を中心に、展示、教育等に活用できることを期して修理を行っているが、そのうち緊急性の高いものから修理を実施してきた須磨コレクションについては、要修理度が次の段階にあるものや、新たに寄贈を受けたものについて修理を実施し、また焼痕のあることで有名な二月堂焼経について、適正な修理方法を検討して修理を実施した。 - 修理に関しては、契約方法、業者選定の適正化のため、「修理契約委員会」（外部委員：根立研介氏）において、作品ごとに契約方法を決定し、3 件を企画競争、6 件を随意契約とし、企画競争とした 3 作品については「請負候補者選定委員会」（外部委員：梶谷亮治氏）で業者を決定した。								
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経 年 変 化	19	20	21	22
	収蔵品修理件数 文化財保存修理所修復資料のデータベース化	9 件 333 件	10 件程度 250 件程度	B A		15 2,377	17 686	5 481	9 333
年度実績 評価総括	S ㊤ B C F (S、F の理由)								
中期計画 記載事項	修理、保存処理を要する収蔵品等については、機構の保存科学・修復技術担当者が連携し、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を取り入れ、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。								
中期計画に対して順調に成果を上げているか。				順調					

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承								
事業名	(3) 計画的な修理								
担当者	担当部課	学芸部保存修理指導室	事業責任者	保存修理指導室長 谷口耕生					
実績・成果	・前年度に引き続き、当館紀要「鹿園雑集」13号（平成23年3月刊行）に「奈良国立博物館文化財保存修理所 修理一覧（平成21年度）」を掲載予定。併せて修理報告資料の整理を進め、将来のデータベース化に備えている。 ・長期にわたり展示に活用する寄託品の修理を、今年度から館の修理費を用いて実施することとし、京都・妙法院所蔵の重要文化財 木造千手観音立像（第20号）の修理に着手した。 ・館蔵品のうち計8件の本格修理に新規着手し、年度内に4件完了。 内訳 絵画 2件（※うち国宝 紙本墨画淡彩山水図 1件は2ヶ年継続事業の第1年度） 書跡 1件 漆工 1件 考古資料 4件（※うち3件は2ヶ年継続事業の第1年度） ・館蔵品1件（二塚古墳出土遺物25点）について、平成21～23年度の3ヶ年継続の修復事業として前年度から本格修理に着手しており、本年度は第2年度として実施中。 ・以上、館蔵品修理は合計9件（うち前年度からの継続1件） ・当館文化財保存修理所で修理施工された木造彫刻作品4件について、京大大学生存圏研究所に委託して樹種同定調査を実施し、その成果を当館研究紀要『鹿園雑集』第13号に掲載した。								
補足事項	・本年度新たに「長期受託文化財修理実施要項」を策定し、長期にわたり展示に活用する寄託品の修理を、今年度から館の修理費を用いて実施することとし、京都・妙法院所蔵の重要文化財 木造千手観音立像（第20号）の修理に着手した。 国宝 紙本墨画淡彩山水図 本格修理 (本年度は2ヶ年継続事業の第1年度)								
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	修理件数	9件	5件	S		10	8	11	9
年度実績 評価総括	(S) A B C F (S、Fの理由) 展示に活用するため、寄託品に対しても修理を行うこととした。								
中期計画 記載事項	修理、保存処理を要する収蔵品等については、機構の保存科学・修復技術担当者が連携し、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を取り入れ、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。								
中期計画に対して順調に成果を上げているか。					順調				

中項目	1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
-----	---

事業名	(3) 計画的な修理									
担当者	担当部課	博物館科学課	事業責任者	保存修復室長 藤田 励夫						
実績・成果	①館蔵品を中心に、展示や損傷の程度を勘案して、緊急性の高い文化財（本格修理 19 件、応急修理 27 件 合計 46 件）を修理した。 ②加えて九州をはじめとする館外所蔵者負担による文化財修理 23 件のため、当館の保存修復諸施設を積極的に活用し、うち 6 件については現地修理を行った。館費修理とあわせて 69 件の修理を実施したことになる。 ③修理指針の検討のため、各分野の担当研究員とともに修理経過をみながら検討を重ねた。 ④修理指針の検討のための調査について、紙繊維の分析、絵画彩色の蛍光 X 線分析や顕微鏡観察による調査、X 線、CT スキャンを活用した調査を実施した。 ⑤カビなどの生物被害について、顕微鏡観察や写真撮影などを行った。 ⑥漆風呂、板仮張り等の修理用備品を新調した。 ⑦修理報告書および修理経過を示す画像データを整理して、データベース化に備えた。									
補足事項	①館費による修理件数 46 件(本格 19、応急 27) （絵画 20（うち応急 13）、書跡 7（うち応急 2）、彫刻 6（うち応急 5）、建築模型 1（うち応急 1）、陶磁 1（うち応急 1）、漆工 3（うち応急 2）、考古 2（うち応急 1）、歴史資料 6（うち応急 2）） ②修復施設 1～3 では、国宝修理装飾師連盟が館所蔵品 13 件のほか、国宝・那覇市所蔵琉球国王尚家関係資料文書記録類や重要文化財・京都国立博物館所蔵旧円満院宸殿障壁画など 38 件の修理を実施した。4 では美術院が 6 件、5 では帛芸匠が 3 件、6 では目白漆芸文化財研究所が 9 件の館所蔵品等の修理を実施した。（69 件） ③・④修理技術者により技術的な判断に加えて、絵画、書跡、漆工、彫刻、考古などの各専門分野を持つ研究員や最新分析機器を駆使した文化財科学専門の研究員と共同して、最善の修理を行うことができた。 ⑤生物被害への対応策を検討するため、カビや虫についての調査を充実させた。 ⑥新調した備品を修理施設に設置し、修理事業に活用した。									
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22	
	本格修理件数	19 件	15 件	A		22	25	24	19	
	修復施設の活用（補助事業等）	23 件	—	—		8	15	26	23	
	科学的調査	7 件	—	—		10	10	7	7	
	表具裂データ	9 件	—	—		42	32	24	9	
年度実績 評価総括	S (A) B C F (S、F の理由)									
中期計画 記載事項	修理、保存処理を要する収蔵品等については、機構の保存科学・修復技術担当者が連携し、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を取り入れ、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。									
中期計画に対して順調に成果を上げているか。			順調							



九州国立博物館所蔵 交易船図巻の
修理風景